

報道関係各位

2009年9月30日  
緑内障フレンド・ネットワーク

緑内障フレンド・ネットワーク 患者会員調査

## 緑内障の診断年齢 平均 51.6 歳 診断時、3 人に 2 人はすでに視野欠損

眼が不調でも 8 割は「老眼」「視力低下」「眼の疲れ」と自己判断 - 発見が遅れる一因

緑内障の啓発を主に活動する患者組織である緑内障フレンド・ネットワーク(代表:柿澤映子、会員:1,641名)は、緑内障患者の実態を把握するため、2009年8月27日~9月10日、患者である会員を対象にアンケート調査を実施しました。

その結果、緑内障と診断された年齢は平均 51.6 歳で、診断された時点で 3 人に 2 人はすでに視野が欠損していたことがわかりました。診断前に、緑内障の症状である「視野が狭く感じた」人は全体のわずか 10.9% (88/808 人)と極めて少なく、また、「緑内障の怖さ」として多くの患者が「自覚症状に乏しいので早期発見が難しいこと」を挙げており、自覚症状に乏しいことが、緑内障発見を遅らせてしまう大きな原因のひとつとなっていることが改めて示されました。

一方、視野欠損の可能性のある見え方や出来事を感じていても、8割は「老眼」や「視力の低下」、「眼の疲れ」を疑い、「緑内障を疑った」人はわずか 5.7% (17/297 人)でした。

今回の調査から明らかになった緑内障の平均診断年齢 51.6 歳は、多くの人々が、老眼などによって眼の不調を感じる年代とも重なります。この時期に、緑内障の症状である視野欠損から眼の不調や出来事を経験しても、老眼や視力の低下だろうと安易に自己判断してしまいがちで、緑内障を早期に発見する機会を逃してしまう危険性があります。緑内障の怖さは、多くの患者が実際に経験し指摘しているように、自覚症状に乏しく早期発見が困難であり、一旦欠けた視野は元には戻らないことです。40 歳を過ぎたら、眼の不調の有無に関わらず、緑内障の早期発見のためにも年に 1 度は眼科専門医で眼底検査などの緑内障の検査を受けていただきたいと思います。

緑内障フレンド・ネットワーク事務局長 野田 泰秀

### 【調査結果の要約】

#### **緑内障診断時、平均年齢は 51.6 歳。**

緑内障と診断された年齢は、平均で 51.6 歳(先天性緑内障を除く)。

年代別では、40 代が 26.8% (215/803 人)、50 代が 35.6% (286/803 人)と 40・50 代で全体の 62.4% (501/803 人)を占めました。

#### **緑内障診断時、3 人に 2 人はすでに視野が欠けていた。**

緑内障と診断された時の視野欠損状態は、「少し欠けていた」46.2% (378/818 人)、「半分程度欠けていた」11.4% (93/818 人)、「かなり欠けていた」8.8% (72/818 人)となり、合わせて 66.4% (543/818 人)、3 人に 2 人はすでに視野が欠損していました。また、5 人に 1 人の 20.2% (165/818 人)は視野が半分以上欠けていました。一方、視野が欠けていない状態で発見されたのはわずか 12.2% (100/818 人)でした。

**緑内障の自覚症状である視野の狭窄を感じたのはわずか 10.9%。**

緑内障診断前に、「視野が狭く感じた」人は全体のわずか 10.9% (88/808 人)。また、36.5% (295/808 人) は見え方の不調や視野欠損の可能性のある出来事を感じていませんでした。

**緑内障は「一旦欠けた視野は元に戻らないこと」が最も“怖い”。**

“緑内障の怖さ”はどのような点かを聞いたところ、「一旦欠けた視野は元に戻らないこと」と回答した人が 40.2% (327/814 人) で最も多く、次いで 36.4% (296/814 人) が「自覚症状に乏しいので早期発見が難しいこと」と回答しました。

**視野欠損の可能性があっても 8 割は「老眼」「視力の低下」「目の疲れ」を疑う。**

緑内障診断前、視野欠損の可能性のある見え方や出来事を感じていても、大多数の 80.1% (238/297 人) が「老眼」「視力の低下」「目の疲れ」のいずれかを疑い、緑内障を疑った人はわずか 5.7% (17/297 人) でした。また、9.1% (27/297 人) は視野欠損の可能性のある見え方、出来事を経験しても「特に何も疑わなかった」と回答しました。

**緑内障は「視野が欠損し、自覚症状に乏しい病気」と知っていても、約半数は「眼底検査」を全く受けず。**

緑内障について 22.2% (183/824 人) は「視野が欠損し、かつ自覚症状に乏しい病気である」ことを知っていましたが、そのうち約半数の 48.1% (88/183 人) は、緑内障発見に有効な「眼底検査」を全く受けていませんでした。

**眼に何らかの異常を疑っても、3 割は眼科を受診しない。**

見え方の不調や視野欠損の可能性のある出来事から、眼に何らかの異常を疑い眼科を受診した人は 68.0% (289/425 人)、一方、13.2% (56/425 人) が「何もせずそのまま放置」、11.8% (50/425 人) が「眼鏡店へ行き眼鏡を作った」、2.1% (9/425 人) が「市販の目薬を点眼」、1.2% (5/425 人) が「眼のマッサージをした」、0.9% (4/425 人) が「眼に良いといわれるサプリメントを飲んだ」と回答し、合わせて 29.2% (124/425 人) は眼科を受診していませんでした。

\* 調査の概要につきましては別紙をご参照ください。

---

本リリースに関する報道機関からのお問い合わせ  
緑内障フレンド・ネットワーク事務局  
〒103-0027 東京都中央区日本橋 1-2-16-501  
TEL:03-3272-6971 FAX:03-3272-6972  
<http://www.gfnet.gr.jp> e-mail: [info@gfnet.gr.jp](mailto:info@gfnet.gr.jp)

### 緑内障とは

緑内障は眼球の中の圧力(眼圧)が上昇することにより視神経が損傷を受け、視野(見える範囲)が徐々に欠けていき、放置すると失明する危険性がある病気です。日本では40歳以上の20人に1人が発症していると言われ、視覚障害(中途失明)の原因の第1位となっています。特にNTG(Normal Tension Glaucoma:正常眼圧緑内障)という眼圧が正常値にも関わらず視野が欠けていく緑内障のタイプが緑内障全体の約7割を占めていると言われています。NTGは眼圧検査だけでは発見できず、眼底検査、視野検査が診断の為に必要です。約8割から9割の患者が未受診と言われ、失明を未然に防ぐためには、早期発見、早期治療が大変重要です。

緑内障フレンド・ネットワーク <http://www.gfnet.gr.jp/>

緑内障フレンド・ネットワークは、2000年6月1日に設立された緑内障の患者組織です。緑内障の患者、家族・身内に患者のいる人、活動に賛同する個人、団体、企業などによって構成されています。代表には、自身も緑内障で、これまでも緑内障の知識普及のために活動を続けてきた柿澤映子が就任し、緑内障の研究と治療に長年携わってきた北澤克明・日本緑内障学会 前理事長が代表顧問としてサポートしています。また本ネットワークは、世界緑内障患者協会(WGPA)の一員として日本緑内障学会、日本眼科医会からも支持を得ています。

これまでに、緑内障ホットラインの運営、ホームページの開設、東京都や厚生労働省への陳情、書籍の出版、会員の集い、会報の発行、患者手帳の発行、一般の方々への啓発活動等を行っております。

---

【参考資料】

緑内障フレンド・ネットワーク「患者会員アンケート調査」概要

**調査目的:** 緑内障の実態を把握し、今後の啓発活動に役立てる。

**調査設計:** 調査対象 緑内障フレンド・ネットワークの患者会員 有効回答:824 名

調査方法 郵送調査

調査地区 全国

調査期間 2009年8月27日～9月10日

**内訳:**

	男性		女性		計	
40歳未満	19	(7.6%)	17	(3.0%)	36	(4.4%)
40代	40	(16.1%)	60	(10.4%)	100	(12.1%)
50代	56	(22.5%)	137	(23.8%)	193	(23.4%)
60代	68	(27.3%)	233	(40.5%)	301	(36.5%)
70歳以上	66	(26.5%)	128	(22.3%)	194	(23.5%)
<b>計</b>	<b>249</b>	<b>(30.2%)</b>	<b>575</b>	<b>(69.8%)</b>	<b>824</b>	<b>(100%)</b>

平均年齢: 61.2歳 (男性:59.7歳、女性:61.9歳)

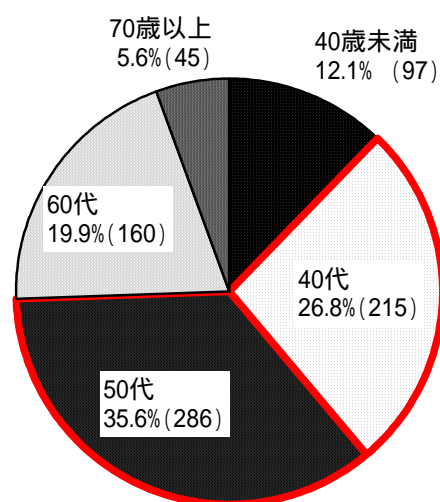
## 調査結果の詳細

### 1. 緑内障診断時の年齢

緑内障診断時の平均年齢は 51.6 歳\*でした。年代別では、50 代が最も多く、35.6% (286/803 人)、次いで 40 代が 26.8% (215/803 人)となり、40・50 代で全体の 62.4% (501/803 人)を占めました。

\*先天性緑内障の年齢は除いて計算しています。

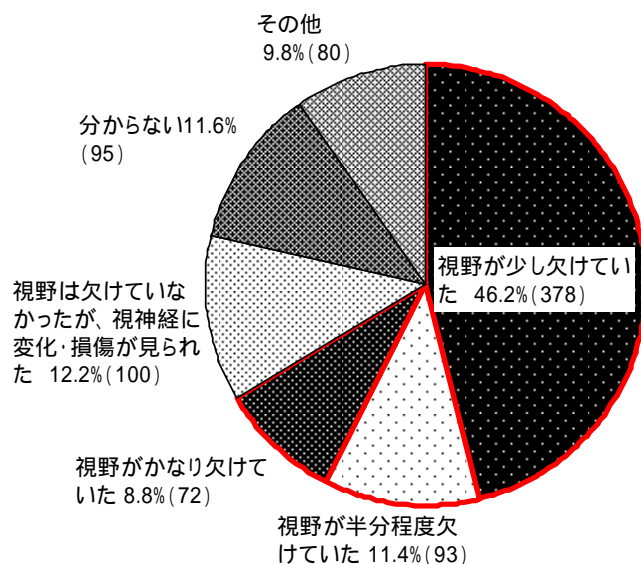
質問 . 緑内障と診断されたのは、何歳のときですか。(n=803、SA)



### 2. 緑内障診断時の視野欠損の状況

緑内障と診断された時の視野欠損の状況は、「視野が少し欠けていた」46.2% (378/818 人)、「視野が半分程度欠けていた」11.4% (93/818 人)、「視野がかなり欠けていた」8.8% (72/818 人)で、合わせて 66.4% (543/818 人)、3 人に 2 人はすでに視野が欠損していました。また、5 人に 1 人の 20.2% (165/818 人)は視野が半分以上欠けていました。一方、視野が欠けていない状態で発見されたのは、わずか 12.2% (100/818 人)でした。

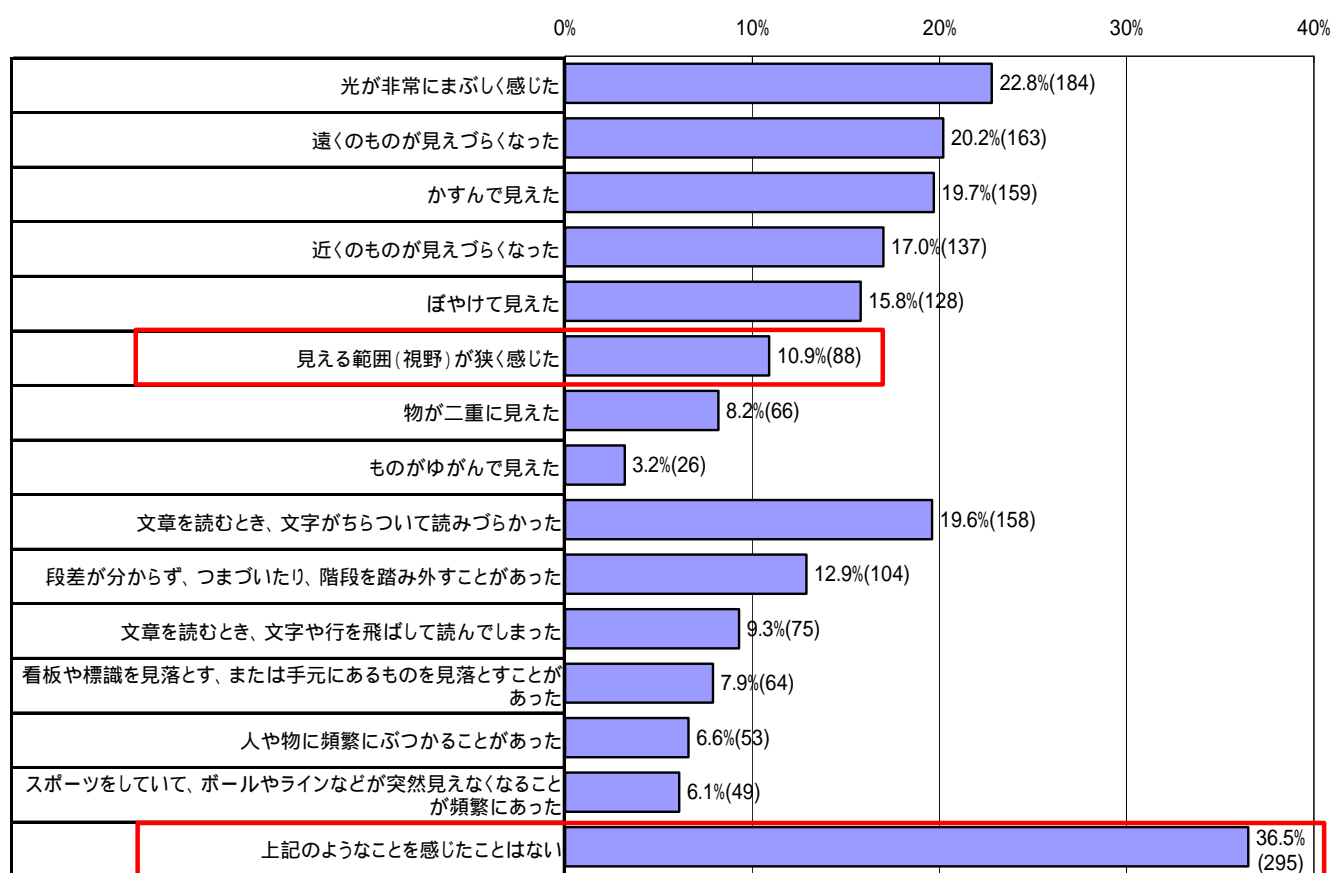
質問 . 緑内障と診断された時点での病状についてお教えてください。(n=818、SA)



### 3.診断前、「視野狭窄」を感じた割合

緑内障と診断される前に、緑内障の症状である「視野が狭く感じた」人は、全体のわずか10.9%(88/808人)でした。一方、36.5%(295/808人)は、見え方の不調や視野欠損の可能性のある出来事を感じていませんでした。

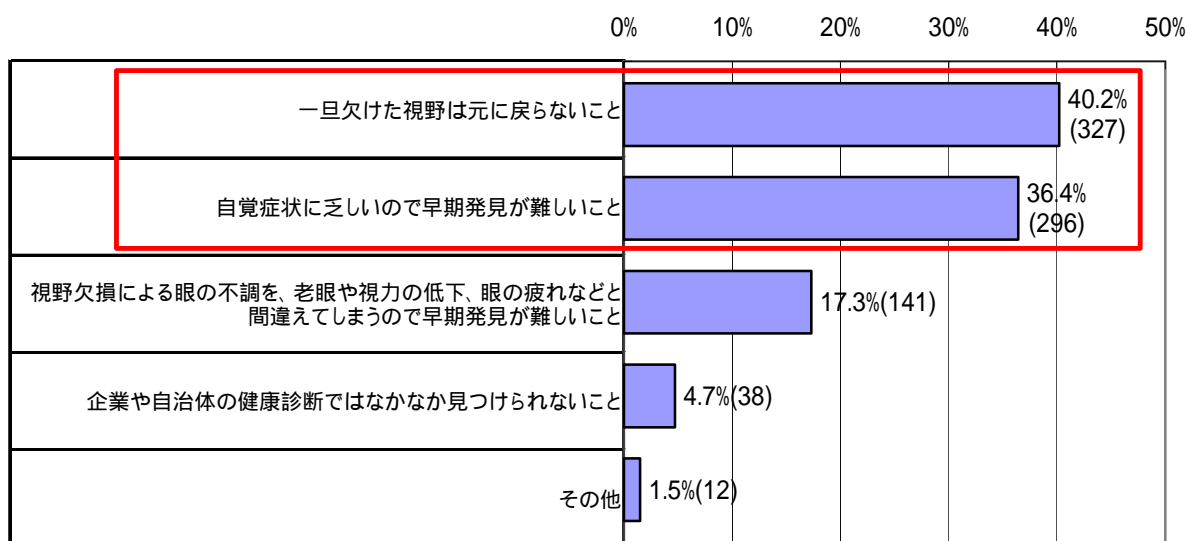
質問. 緑内障と診断される前に、以下のような見え方や日常生活での出来事はありましたか。  
(n=808, MA)



#### 4.伝えたい緑内障の怖さ

40歳以上でまだ緑内障の検査を受けていない人に対し、緑内障の怖さを伝えるとしたらどのようなことを最も伝えたいかをたずねたところ、最も多かったのが「一旦欠けた視野は元に戻らないこと」で、全体の40.2%(327/814人)を占め、次いで36.4%(296/814人)が「自覚症状に乏しいので早期発見が難しいこと」と回答しました。

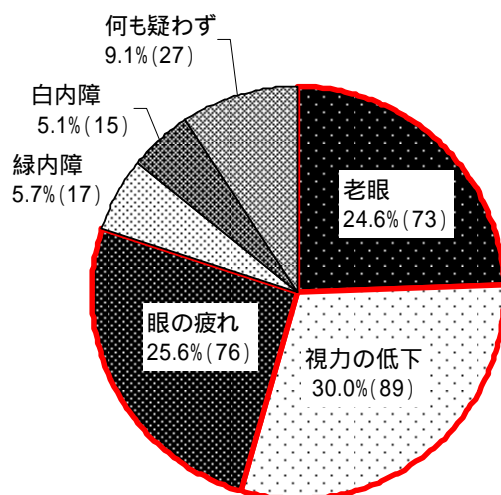
質問. 40歳以上でまだ緑内障の検査を受けていない人に対して、あなたが伝えたい緑内障の怖さはどのようなことですか。(n=814, SA)



#### 5.視野欠損の可能性のある見え方、出来事から疑うもの

緑内障の診断前、視野欠損の可能性のある見え方、出来事から、80.1%(238/297人)が「老眼」、「視力の低下」、「眼の疲れ」のいずれかを疑い、緑内障を疑った人はわずか5.7%(17/297人)でした。また、9.1%(27/297人)の人は、視野欠損の可能性のある見え方、出来事を経験しても「特に何も疑わなかった」と回答しました。

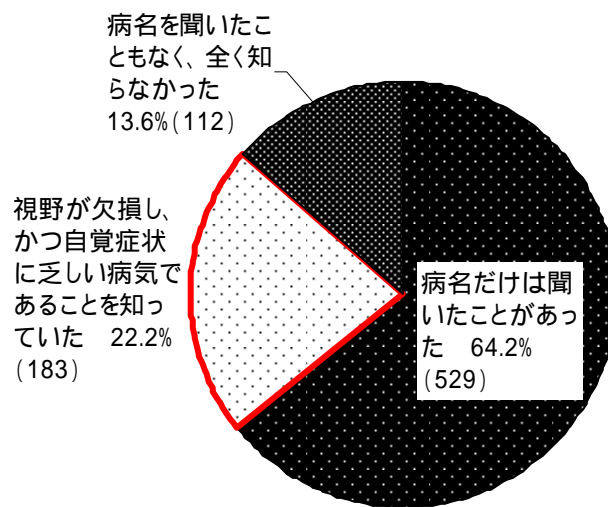
質問. 視野欠損の可能性のある見え方や出来事から、最初に何を疑いましたか。(n=297, SA)



## 6.緑内障に関する認知と眼底検査の受診率

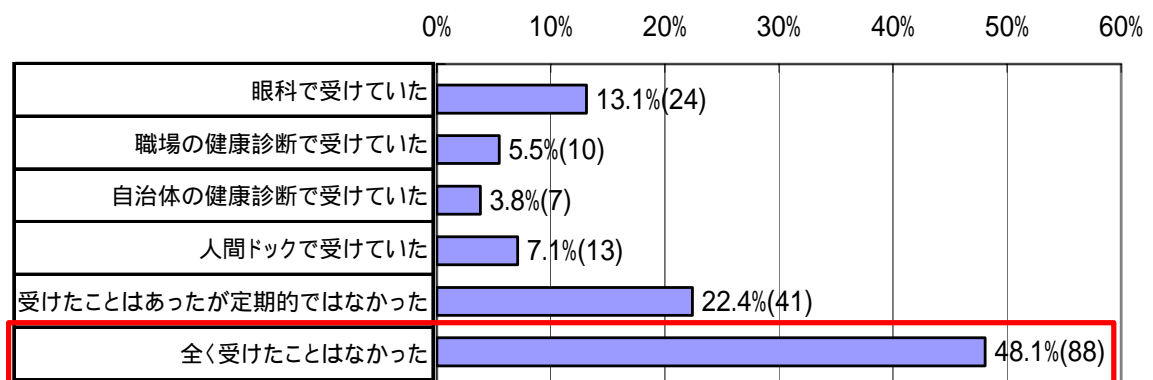
緑内障と診断される前に、緑内障についての認知度で最も多かったのは、「病名だけは聞いたことがあった」で全体の 64.2% (529/824 人) を占め、次いで 22.2% (183/824 人) が「視野が欠損し、かつ自覚症状に乏しい病気であることを知っていた」と回答しました。また残り 13.6% (112/824 人) は「病名を聞いたこともなく、全く知らなかった」と回答しました。

質問：緑内障と診断される前に「緑内障」についてどのくらい知っていましたか。(n=824、SA)



また上記の、診断前に緑内障について「視野が欠損し、かつ自覚症状に乏しい病気であることを知っていた」と回答した 183 人のうち、約半数の 48.1% (88/183 人) は、緑内障発見に有効な「眼底検査」を一度も受けていませんでした。

質問：緑内障と診断される前に、緑内障発見のための検査(眼底検査)を定期的を受けていましたか。(n=183、SA)

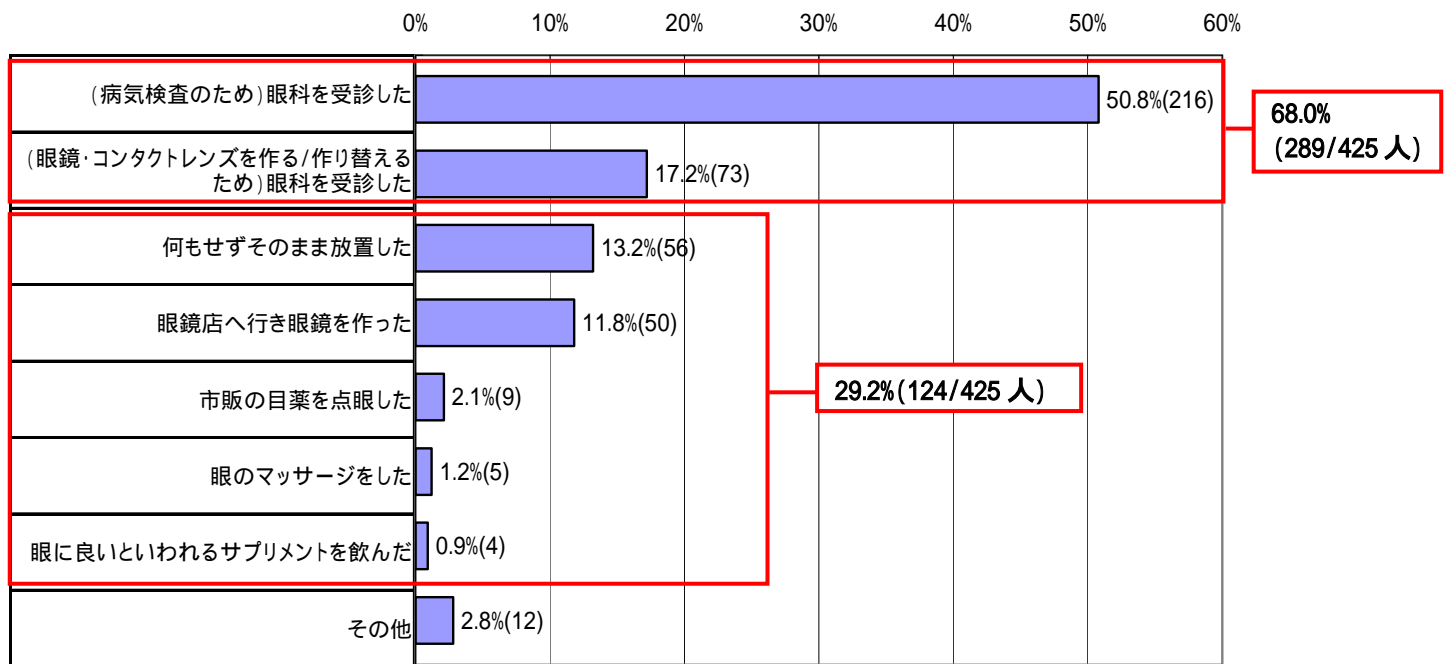




### 7.眼の異常を疑い、最初に行った行動

見え方の不調や視野欠損の可能性のある出来事から、眼に何らかの異常を疑い、眼科を受診した人は 68.0% (289/425 人) でした。一方、13.2% (56/425 人) が「何もせずそのまま放置」、11.8% (50/425 人) が「眼鏡店へ行き眼鏡を作った」と回答するなど、合計 29.2% (124/425 人) が眼科を受診していませんでした。

質問 . 見え方の不調や出来事から何らかを疑った結果、最初にどのような行動を取りましたか。  
(n=425、SA)



以上